

家族を守る「安心の備え」 008

おくりびとのお葬式

ディパーチャーズ・ジャパン株式会社

中村正平

医療介護連携室 室長



0120-379-377

departures-japan.com

東京都中央区築地3丁目16番9号
築地室町ビル9F

ビジョン

当社は『よりよいお別れで、より良い社会を』目指し、お別れの質を追求し続けています。医療介護従事者と共に『みんながおくりびとになる』の実現すべく、医療介護連携室は誕生しました。

ディパーチャーズ・ジャパン株式会社で医療介護連携室の室長を務める中村正平さんは、訪問介護、デイサービス、ショートステイ、サービス付き高齢者向け住宅の運営など、長年にわたり介護の現場に向き合ってきました。その経験を通じて見えてきたのは、看取りは亡くなった後だけでなく、生きている時間の関わりから始まっているということです。現在は「おくりびとのお葬式」の一員として、医療・介護・葬祭をつなぐ医療介護連携に取り組み、終末期ケアセミナーなどを通じて、現場の不安を安心へ変える活動を広げています。中村正平室長の歩みと温かいお別れを支える実践を伺います(2026年5月取材)。

看取りへの視点を育んだ原点 | 北欧福祉と介護現場での多様な経験

中村さんの生い立ちについて簡単にお聞かせください。

出身は北海道の札幌市です。小学校の低学年までを札幌で過ごした後、父の転勤を機に家族で上京しました。中学からは父が単身赴任となったこともあり、私自身は青春時代の多くを東京で過ごしてきました。学生時代は高校3年生までサッカー漬けの毎日でした。私自身はベンチには入れなかったんですが、チームは全国大会に出場するほどの強豪でした。個人としては結果を残すことはできませんでしたが、サッカーは完全にやり切ったと感じ、そこから将来の新しい目標を考えるようになりました。



それからどのようにして福祉の道へ進まれたのでしょうか。

大学進学の際、まずは総合大学で4年間、将来をじっくり考えようと思い、東海大学の文学部北欧文学科（現在の北欧学科）に入学しました。一般的に見ると珍しい学科だったんですが、そこで学んだことが大きな転機になりました。北欧といえば福祉国家として知られており、大学2年の夏に短期留学し、福祉施設の見学をしました。北欧の福祉を学ぶうちに、その奥深い世界に大きな関心を抱くようになり、その探究心はやがて『まずは日本の福祉を知ることから始めよう』という確かな行動へと繋がり、大学3年生の時にヘルパーの資格を取得しました。その実習先が、後に就職することになる在宅介護サービスを提供する会社でした。



当時は日本の介護業界が大きく変わるタイミングだった頃ですね。

はい。私が大学を卒業した2000年は、就職超氷河期でしたが、4月からは日本でも介護保険制度がスタートするという、業界全体が非常に盛り上がっていた時期でした。

<https://zaita9iryu.com/>

大学で学んだことに関連する仕事に就きたいという思いもあり、そのブームに乗るような形でご縁をいただき、私の介護人生がスタートしました。実は就職活動中、中学生の時に44歳という若さで亡くなった叔父の儀式が非常に印象に残り、納棺師の方の所作や僧侶の温かいお話に感銘を受けた経験から、葬儀のお仕事も選択肢にあったんです。しかし、葬儀会社の面接に向かう途中で電車が止まってしまう出来事があり「今はご縁がないのだな」と感じて、まずは介護の現場へと進みました。

入社後は、どのような現場をご経験されたのですか。

介護のあらゆる局面に立ち会い、多種多様な経験をした13年間を過ごしました。最初は訪問介護のヘルパーとして、夜中におむつ交換に回るような、サポートの必要性が高い方々のケアからスタートしました。コミュニケーションを取るのも難しい方々と接する中で、現場の基礎を学びました。その後、デイサービスに異動したのですが、今までは寝たきりの方の介護ばかりだったので、歩いていらっしゃる方を見て、同じ要介護者でも全然違うんだなと大変驚いたのを覚えています。デイサービスでは約5年間、レクリエーションなどを通じて皆様に楽しい時間を過ごしていただくサポートを行いました。



その経験の中で、現在につながるような気づきがありましたか。

はい。デイサービスでの楽しい時間も大切ですが、今振り返ると「もっとご自身の人生を振り返り、未来に向けた準備をする時間を作れたのではないかと」感じています。ご自身でしっかりと話しできるうちに、形に残せるものを作ったり、ご家族への想いを整理したりする。そうした未来志向の準備があれば、突然のお別れが来てしまった時でも、温かい記憶として次へ繋ぐことができます。それから、高齢者福祉センターで自立された方々のサポートや、世田谷の三軒茶屋で54床の単独型ショートステイの立ち上げと運営なども経験しました。ショートステイでは、「泊まる前・泊まる時・泊まった後」という3つのフェーズで信頼関係を築くことの重要性を学び、それが現在の医療介護連携室でお伝えしている看取りのサポートにも直結しています。

医療・介護と看取りをつなぐ決断 | 介護事業の集大成からおくりびとの道へ

その後、独立開業を決意されたきっかけは何だったのでしょうか。

35歳になる手前の頃、サポートの必要性が高い方から自立されている方まで一通りの現場を経験し、次に何をしようかと考えていました。社内でキャリアアップする道もありましたが、現場から離れるのは少し違うなと。ちょうどその頃、人事の部署へ異動になったことで社外の勉強会などに参加するようになり、私より若い方々が起業して活躍している姿に大きな刺激を受けました。木村社長にもこの頃出会いました。そこで自分も挑戦してみようと決意し、フランチャイズの仕組みを利用して独立し、埼玉県川越市で38室のサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）の経営と運営をスタートさせました…



続きはQRコードからアクセスしてください → → →

